

NPO

## エコロジカルな暮らしは災害に強い

花巻市

酒匂 徹 自然農園ウレシバモシリ

取材日 2011.9.13

ウレシバモシリとはアイヌ語で「この自然界そのもの」の意。「循環と共生に満ちた空間での自然も人も搾取しない暮らし」をモットーに、パーマカルチャー（身の回りの自然環境と調和した持続可能な人間の生活圏を創りだすためのデザイン手法）に基づいた農園づくりに取り組んできた。自然栽培と出会ってからは可能な限り不耕起栽培に取り組む。

## 3月11日 14時46分

震災発生30分前に、バイオディーゼルアドベンチャーの山田氏が取材に来ていた。3年前の岩手県内陸地震の時より小さかったが、揺れている時間は長かった。ガラスも落ちることはなかったが、電気は停電した。

今はソーラーを使っているが震災当時はなかったため、電気が4-5日使えなくなった。小さな井戸はあるが、電気ポンプで汲み上げているので水も使えなくなった。飲み水は防災用としてポリタンクに常備していた。井戸の止まったポンプからも多少惰性で出た。車に燃料が残っていたので、近くの湧き水を汲みに行った。暖房と給湯は薪を利用している。

食料はもちろん、問題がなかった。冷凍庫にストックもあったが、まだ寒い時期だったのでそれほど影響はなかった。

実家は北上にあるが、オール電化のため何も使えない状態になっていた。

## 復旧・復興への取り組みについて

震災後すぐ、味噌、米、水、衣類、防寒具を持って支援に行こうと思った。しかし、震災後1-2日は住民以外は被災地に入ることができなかったので、2-3日後から被災地に入った。最初に行ったのは釜石だ。釜石は都市ガスが多いため、電気だけでなくガスも使えなくなった。パイプラインで繋がっていた今までのメリットがすべて無に帰した。避難所である大船渡市内の公民館では、震災直後だというのに住民が風呂に入ることができた。30軒ほどある集落のうちの2軒が薪ボイラーを使っていたからだ。薪は瓦礫の中から男性達が集め、1日中薪を使って交替で入浴していた。避難所を回っていて感じた事は、男性に元気がないということだ。女性は炊き出しや掃除などやることが多く、元気だった。仕事を失った男性はやることなく、男性に仕事をつくることも必要だと感じた。

1ヶ月間は支援活動を続けていたが、4月上旬まではガソリン、軽油を手に入れることが難しかった。1週間後に宅急便が動き出してからは、多い日は100ケース以上の緊急支援物資が全国から集まった。地元の有志が中心となって仕分け、ニーズに応じて被災地に配布した。ガソリン・軽油がなくても廃油で走る車が、廃油や支援物資を満載にして応援に来てくれた。バイオディーゼル燃料も送って頂いたので、ガソリンが自由に手に入るようになるまで頑張れた。

自宅では被災地へ向かうボランティアの受け入れを行い、多い時で20人程が寝泊まりした。その後も常時7-8人が宿泊した。

多くの善意が寄せられありがたい限りだったが、必要な物資がほしいと言った時にはなく、タイムラグがあった。そのためものによっては届けにくいものも出てきた。米、味噌、水など基本的な食料のニーズがあったのは自衛隊が入る前の3日くらいだけだ。カップラーメン、レトルトカレーなどの保存食も喜ばれたのは最初だけだ。必要な時に必要な方にお届けする難しさを感じた。

## いざという時…

仕事が農業なので、機械もそれなりに使用している。春の農作業本番まで燃料が行き渡らなければどうしようかと考えた事もあった。この空間の中でなるべく循環し、外からくるものに頼らない農場にしたいと考えているが、現実的に車、機械も使うので、今回の災害で改めて基盤の脆弱さを感じた。もっときちんと向き合って、現実が厳しいからと後回しにしてきた事の優先順序を考えて実現に移していきたい。独立系の小さなソーラーパネルを設置したのもその一環だ。車も2タンク方式SVO(軽油と廃油で走る車)にした。今後は馬を使って耕運していきたい。

## 震災から半年過ぎて…

エコロジカルな暮らしは災害に強いのがメリット

だ。エネルギーも一極集中するのではなく、小規模分散させたほうが多少経済効率は劣ってもいざという時には強い。仮設もオール電化では危うい。今後の暮らしを考えるキッカケになったのではないだろうか。自転車が街に溢れ、親子でゆっくり散歩するなど、本来あるべき姿が見られ、“大事に使うこと”が本当はできることが分かったはず。“こっちの暮らしが良かったのかも”という気持ちを皆でシェアし、そういった暮らしに向かえるようになるといい。

みんなの気持ちを動かすには、“こっちの方が心地よい”と思うこと。避難所は大変だったと思うが、皆で過ごした方が楽しい部分もあったはず。皆で寄り添って暮らす良さを実感したはずだ。新しいコミュニティづくりは始まったばかり。今はまだ変わったかどうか分からないが、果てない消費に固執する暮らしから、手作りの豊かさを分か

ち合う暮らしに喜びを見出していく流れはこれからだと思っている。



## 企業

# 津波に襲われ生き残った私達の経験は、これからの日本のための経験。

釜石市

岩崎 昭子、伊藤 聡 宝来館 女将、番頭（ばんがしら）

取材日 2011.10.20

震災前から「かまいしグリーン・ツーリズム」に参加、自然体験の受入れに取り組んできた。震災後は地域の財産である山と海を川でつなぎ、自然と歴史をとりあげた新しい町づくり「どんぐりウミネコ村」構想を発案。2011年10月31日より仮設店舗で食事処「松の根亭」の営業を再開、宝来館は2012年1月5日から一部営業を再開した。

## 3月11日 14時46分

《女将》 当日は法事、お祝いの会の予定があり宝来館でお客様の接客をしていた。2日前にあった地震とは違い、記憶にある宮城県沖地震とも違うと感じた。「三陸沖地震が近いうちに来るぞ」と言われていたこともあり、今日がその日なのだと直感した。揺れがおさまった頃に娘が荷物を取りに自宅へ行ったが、「もうこの家を見るのはこれが最後かなと思った」と言っていた。そうした直感を働かせるような、あるいは感じさせるような揺れの大きさと長さだった。

《番頭》 あの揺れで大きな津波が来ると思い、自分の車を諦めた。10年乗っていたので愛着がある車だったが、今日で終わりだなと思いながら山を登っていた。

《女将》 津波の到達は地震発生から30-40分後のこと。宝来館は避難ビルだったが、4階まで



上がるということを思いもしなかった。ビルに逃げる揺れではなく、山に逃げなければいけない天変地異が起きたのだと直感した。

一度山へ登ったが、集まってきた地域の皆さんは宝来館に留まっていたので、スタッフが迎えに行った。間にあわないから呼んでこようという思